母娘風俗嬢

～親子丼～

目次

●表　紙…Ｐ１

●目　次…Ｐ２

●あらすじ…Ｐ３

●お風呂場で前戯を競い合う母娘…P4～P11

●娘にフェラチオを教える母…P11～P16

●母に生中出しか？娘のセカンドヴァージンか？…P17～P26

●エピローグ…P27～P30

あらすじ

今は派遣社員でその日暮らしをしている私の友人の実体験を若干の脚色のもと小説化。
この友人、リーマンショックの前は正社員で結構いい給料を貰っていた。
金はほとんど貯金せずに、ほぼ風俗に注ぎ込んだそうだ。
そんな生活を満喫するなかでお気に入りの風俗嬢を２人見つけた。
一人は会社の最寄り駅のホテヘルでバイトをしている専門学校生レナちゃん（十九歳）。
もう一人は出張先で頻繁に呼ぶシングルマザーの人妻デリヘル嬢カオリさん（四十二歳）。
実はこの二人実の親子であり、互いに秘密にして風俗で働いていた。
友人も勿論、親子だとは思わなかった…。

大まかなプロフィール

レナちゃん
本名：綾
年齢：十九歳
職業：専門学校生（バイトでホテヘル）
３サイズ　B：81（C）/　W：56　/H：78

カオリさん
本名：京香
年齢：四十二歳
職業：介護福祉士（副業でデリヘル）
３サイズ　B：85（F）/　W：63　/H：89

俺（友人）
金があるからって調子こいてた馬鹿。以下省略。

お風呂場で前戯を競い合う母娘

――新店のヘルプで明後日まで東京にいるの。
こっちでも私と遊ばない？
昨日、カオリさんが送ってきたメールだ。
突然のメールだったので昨日は返信できなかった。
今日は仕事が多く深夜まで残業が確定している。
となれば、遊ぶのは明日だなとは考えているのだが、
明日は生理明けのレナちゃんが久しぶりに出勤する予定なのだ。
どちらで遊ぼうか俺は迷いに迷った。
金はボーナスの残りがあるので何とかなる。
ならばどうするかと考えに考えて、俺は妙案を思いつく。
まずレナちゃんのホテヘルに電話を掛ける。
「すいません。別のお店の女の子を僕が呼んで
レナちゃんと３Ｐする事って出来ますか？
オプション料金？あ、はい。その金額ならば大丈夫です。
本人が出来るかどうか確認して折り返す？
分かりました。お待ちしています」
待つ事三十分。ホテヘルからの返答は大丈夫だとの事だった。
次にカオリさんにメールを送る。
――俺が手配した女の子とカオリさんでカップル３Ｐをしたいんだけど大丈夫？
返信は直ぐに来た。
――お店が大丈夫だったら私は大丈夫よ。
分かったとメールを送り返して、
カオリさんがヘルプで来ている人妻デリヘルに電話する。
返答はレナちゃんの時と同じで、
店は構わないので本人に大丈夫かどうか確認して折り返すとの事。
事前に段取りをしておいたので人妻デリヘルから
大丈夫だという折り返しの電話はすぐに掛かってきた。
しばらくしてカオリさんからまたメールが送られてきた。
仕事をしながら合間をぬって返信していく。

――ねえ、相手はどんな娘なの？彼女？
――そんなんじゃないよ。別のお店で俺がお気に入りの娘。
――いくつなの？
――カオリさんの娘さんくらいの歳だね。そのお店のプロフだと。
――そんな若い娘とだなんて緊張しちゃう
――明るい良い子だから大丈夫だよ
――どうしてそんな若い娘と私で３人でしたいって思ったの？
若い娘２人とする方が楽しいって思うんだけど。
――そんな事は無いよ。カオリさんは十分素敵だよ
――嫌だわ、上手い事言って（笑）
――親子丼みたいな雰囲気を味わいたくてこの組み合わせを考えました！
――もう何考えてんのよ（笑）
かなり仕事は立て込んでピリピリしていたのだが、
その合間をちょくちょくぬってよくこんなメールをしたものだと、
我ながら感心する。
翌日、仕事を定時に切り上げた俺は、
足早にホテヘルの受付に行く。
「待ってましたよ。レナちゃん、３Ｐは始めてみたいですんで、
優しくリードしてあげてくださいね」
うるさい。お前などと話しをしている暇は無い。
早々に金を払って待合室にいるとレナちゃんがやって来た。
いつもの様に手を繋いで一緒にラブホテルを目指す。
だが、今日入るラブホはいつも使っている安ホテルではない。
今回の為に奮発して高いラブホの高級感溢れる広い部屋に行く。
この部屋でカオリさんが来るまでの間、レナちゃんと雑談する。
「ねえ、ねえオジサン。どんな人が来るの？可愛い娘？」
「歳はレナちゃんのお母さんくらいかな」
「うわあ。おばさんじゃん。オジサン物好きだね」
「そんな事は無いよ、セクシーで大人の色気たっぷりの美熟女だよ」
「ママくらいの歳でそんな人は芸能人にしかいないよ。
あっ分かった。テクニックが凄いんでしょ？」
「うーん。まあそれもあるけども…」
「熟女だからきっとスッゴイ上手いんだよね？」
「まあ、スッゴイ上手いね」
「おしっ！勉強させてもらお」

「でも、レナちゃんも負けて無いよ。その人はネットリ癒す感じだけど、
レナちゃんは激しくて若々しい感じだから系統がちょっと違うだけで、
優劣はそんなには…」
「よく分かんない」
「ごめん」
「ところでさあ、一昨日からママがこっちに来てるの。
それで一緒にご飯食べたりとか、買い物したりとかして、
色々口うるさくも言われたけど久しぶりに会えて本当に楽しくて…」

コンコンコン…

部屋をノックする音が聞こえた。どうやらカオリさんがついた様だ。
「ちょっと待ってね」
ドアを開けに行く。
開けた瞬間、フェロモンたっぷりのいつもの香水が鼻をついた。
「待った？」
「ええ、若い娘と談笑しながら首を長くして待っておりました」
「ごめんなさい」
「カオリさん何だかいつもより楽しそうだね」
「ええ、こっちで仕事をしている間、娘の所にもちょくちょく顔を出しているの。
あの娘の頑張っている元気な顔を見ながら色々話していると、
私も頑張らなきゃって気持ちになって…」
そんな会話をしながらレナちゃんがいるところまで並んで歩いていく。
「お待たせレナちゃん。この人がカオリさ…」
２人が顔を合わせた瞬間、ただならぬ重い雰囲気が場を支配した。
レナちゃんとカオリさんはしばらく沈黙したまま互いを見つめ合う。
その時の表情は互いに怒りと悲しみが混ざり合い、
驚愕し固まっている非常に複雑な顔だった。
何だか分からないが俺も黙って立ちすくむ。
最初に口を開いたのはカオリさんだった。
「綾！こんなところで何をしてるの！」
「ママこそなんでここにいるのよ！」
俺はこの時になってやっと重い空気になった理由に気付いた。
外面はただ突っ立ているだけだったが、心の中はパニックだった。
だってこんな事があるなんて普通は思わないし、
ましてかちあってしまう事などない。

「介護の仕事以外に働いてる夜のパートってこれだったんだ。
この為に東京に来たんだ、最低！」
「親になんて口を聞くの！販売員のバイトをしているなんて嘘ついて！」
「じゃあホントの事言ったらこのバイトするの許してくれた？」
「許すわけないでしょ。今すぐ止めて家に帰りなさい！」
俺は冷汗を流しながらこの激しい口論を茫然自失で聞き入る。
「こんな事をしているなんて…親がどんな気持ちなのかどうして分からないの！」
「その言葉ママにそっくりそのまま返すよ。親が風俗で働いてるのに、
平気な娘なんていないよ！」
こんな怒鳴り合いが長く続いた。
そして怒鳴りつかれた疲れた2人は、言葉を発するのを止めて睨み合いながら息を上げる。
不意にカオリさんが万遍の笑みを浮かべて俺の方に顔を振り向いた。
「ごめんなさい。私的な事で取り乱しちゃって。
さっ私と楽しみましょ。この娘の分のお金は私が立て替えて置くから安心して」
「立て替えるってなによ！勝手に決めないでよ！」
「綾は早く帰りなさい。後でたっぷり話があるから」
「ママこそ帰りなよ！オジサン、こんなおばさんと遊んでも全然楽しくないよ。
だから私と遊ぼ♪」
甘えた口調で腕を組んで胸を押し付けてきた。
「綾！はしたない事は止めなさい！」
「ふーんだ。若作りして風俗で働いてるママに言われても説得力ありませ～ん。
おじさん、こんなおばさんほっといて2人で楽しも♪今大きくしてあげるからね」
ズボン越にチンポをいやらしい手つきで撫でまわしてきた。
こんな空気にも関わらず俺は股間を固くしテントを作ってしまう。
我ながら自分の神経の図太さに呆れかえってしまう。
「キャハッおじさん元気になってきた。おじさんのって他の人より
大きくて固いから私大好きなんだ」
「…普通は若い娘の方が良いわよね。
でもこんな外見も心も幼稚な娘と遊ぶなんてつまらないでしょ？」
服のボタンを外してブラジャーを露出させたカオリさんは、
俺の手を胸の間に挟み込み身体をもたれさせてきた。
「だ・か・ら…私と遊びましょ」
更に耳に吐息を吹きかけながら服越しに乳首を触ってくる。
「娘の前でこんな事して恥ずかしくないの」
「母親の前でそんな事しておいてよく言えるわね」
2人は口論をし続けながら俺を挑発してくる。